



Middle East within Asia

Research Report Series

No. 9 (2009.7)

日本人の中東以外のイスラム社会観
—— 長期滞在者ならびに駐在経験者 ——

谷川達夫

ニーズ対応型地域研究推進事業

アジアのなかの中東：経済と法を中心に

謝 辞

アンケート調査は、以下の組織の協力の下に実施されました。

第一部 クアラルンプール日本人会 (マレーシア)
 ジャカルタ ジャパン クラブ (インドネシア)
 タシケント日本人会 (ウズベキスタン)
 カザフスタン日本人会
 カラチ日本人会 (パキスタン)
 ナイジェリア日本人会

お世話になりました上記日本人会の皆様方に、ここに改めて、お礼を申し上げます。

第二部 NPO国際社会貢献センター (ABIC)

とりわけ、三幣利夫理事長と名鏡敬治事務局長、ならびに会員の中の中東以外のイスラム国の駐在経験者の皆様の絶大なるご支援を頂きました。あらためて厚くお礼を申し上げます。

調査は、質問項目の立案からデータの分析まで、文部科学省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」プロジェクト『アジアのなかの中東:経済と法を中心に』事務局の統括のもとで、以下のスタッフによって行われた。

加藤 博 (一橋大学大学院経済学研究科教授)
谷川 達夫 (NPO国際社会貢献センター コーディネーター
 一橋大学大学院経済学研究科研究補助員) 本リサーチ・レポート執筆者
岩崎えり奈 (共立女子大学文芸学部専任講師)
吉年 誠 (一橋大学大学院社会学研究科助手)
臼杵 悠 (津田塾大学学芸学部情報科学科4年)

2009年7月

日本人の中東以外のイスラム社会観 ー長期滞在者ならびに駐在経験者ー

調査概要

目的

文部科学省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」中東地域研究プロジェクト「アジアのなかの中東ー経済と法を中心に」は、これまで、「日本と中東との間に観察される認識・評価上のミスマッチを解消し、中東を日本にとって身近なものにする」ため、いくつかの意識調査を実施し、その成果を調査報告書 (Research Report Series) として刊行してきた。

本報告はこうした意識調査のひとつとして 2008 年 7 月に実施された、「中東以外のイスラム国に駐在経験を持つビジネスマンおよび現地長期滞在者」に対する意識調査に基づいている。その目的は、中東以外のイスラム国に生活した日本人の対現地社会・イスラム観を調査し、それとの比較によって、中東諸国で生活した日本人の対中東・イスラム観の特徴を明らかにすることである。

調査対象

調査対象は、次の二つである。

- (1) 中東以外のイスラム国に現在長期滞在する者。
- (2) 過去に中東以外のイスラム国に駐在経験を持つビジネスマンである。

前者に対する調査は各国の日本人会を通して、後者に対する調査は日本貿易会の傘下の国際社会貢献センター (以下 ABIC¹ と称す) を通してなされた。回答数はそれぞれ、88 と 143 であった。

調査項目

調査は、「日本人の対中東・イスラム観」で使ったのとはほぼ同じ項目からなるアンケート票の配付によってなされた。その項目分野は以下の通りである。

- (1) 個人的・家族的特性
- (2) 生活環境
- (3) 職務環境
- (4) 現地生活の中での意識
- (5) 現地で仕事をしている中での意識
- (6) 現地社会への認識

¹ ABICは、Action for a Better International Community の略称である。国際社会貢献センターは商社が主な構成メンバーの日本貿易会の傘下のNPO法人であり、登録会員は約 1920 名である。

(7) 日本と中東以外のイスラム国との経済関係

調査日程

調査のスケジュールは、次の通りである。

2008年7月 中東以外のイスラム国6カ国の日本人会に対してアンケート票を配布する。

また同時に ABIC の会員の中で、過去に中東以外のイスラム国に駐在経験を 持つビジネスマンにアンケート票を郵送する。

2008年9月 アンケート票の回収を終了

本報告書は二部からなり、第一部は中東以外のイスラム国に現在長期滞在する者を対象とした調査結果を、第二部は、過去に中東以外のイスラム国に駐在経験を持つビジネスマンを対象とした調査結果を扱う。

なお、本調査結果との比較の対象である「日本人の対中東・イスラム観－現地長期滞在者」、
「日本人の対中東・イスラム観－駐在経験をもつビジネスマン」については、それぞれ、
Research Report Series No.1, No.2 を参照のこと。また、当プロジェクトのホームページで、
本調査結果の単純集計が公開されている。

<http://www.econ.hit-u.ac.jp/~areastd/research.htm>

第一部

日本人の中東以外のイスラム社会観

－長期滞在者－

はじめに

調査対象 88 名の国別内訳は以下の通りである。

表 A 本調査対象者の駐在国別内訳

滞在国	実数	%
マレーシア	30	34.1%
インドネシア	20	22.7%
ウズベキスタン	15	17.0%
カザフスタン	5	5.7%
パキスタン	12	13.6%
ナイジェリア	6	6.8%
合計	88	100.0%

地域別としては、日本と近くて身近な“東南アジア”グループと、これ以外の“東南アジア以外”グループに分けてデータを比較分析している。

表 B 東南アジアと東南アジア以外のグループ分け

グループ	構成国	実数	%
東南アジア	マレーシア インドネシア ブルネイ	50	56.8%
東南アジア以外	ウズベキスタン カザフスタン パキスタン ナイジェリア	38	43.2%

(注)ブルネイは、第二部 ABIC の調査に1名含まれている。

(1) 個人的・家族的属性

回答者の年齢を、中東の国々に住む日本人 (Research Report Series No.1 を参照。調査対象、405名) と比較すると、中東の方が 20-30 歳代の割合が多い。東南アジアは 40 歳代の割合が多く、東南アジア以外は 50 歳台が多い。駐在員の年齢の二極化が起こり、中東では年齢の若い駐在員も多いが、東南アジアでは現地職員を多く採用して、管理職として年齢が高くかつ経験を持った日本人を起用する傾向が強くなってきている。中東と東南アジア以外が同じような傾向で、東南アジアが異なる傾向を示している。

表 1-1 本調査対象者の年齢別内訳

年齢	中東	東南アジア	東南アジア以外
20-29歳	5.7%	4.0%	5.3%
30-39歳	28.9%	20.0%	26.3%
40-49歳	30.4%	46.0%	28.9%
50-59歳	29.4%	26.0%	31.6%
60歳以上	4.2%	2.0%	7.9%

次に家族の帯同状況を見る。

表 1-2 家族の現地への帯同の状況

	単身赴任	配偶者を同伴	配偶者と子供を同伴
中東	45.1%	18.9%	34.9%
東南アジア	41.3%	19.6%	39.1%
東南アジア以外	70.4%	22.2%	7.4%

東南アジア以外は単身赴任が多く、配偶者と子供を同伴した人が少ない。治安や子供の教育の問題が、単身赴任が多いひとつの理由であると思われる。パキスタンとカザフスタンは、特に単身赴任が多い。中東と東南アジアが同じような傾向で、東南アジア以外が異なる傾向を示している。

(2) 生活環境

ここでは、生活インフラである居住環境と、現地社会でのコミュニケーションについてみる。

表 2-1 住居の形態

	一戸建て	アパート・フラット	ホテル住まい	その他
中東	24.2%	61.5%	2.7%	11.6%
東南アジア	12.0%	82.0%	2.0%	4.0%
東南アジア以外	39.5%	50.0%	0.0%	10.5%

住居の形態は、第二部の過去の駐在員の調査では、一戸建てが70年代まで中東は40%そして中東以外は83.3%であったが、それぞれ現在は中東が24.2%、アジアが12.0%、アジア以外が39.5%に減ってきている。一戸建てのほうが現地の人との近所付き合いが多く、表2-3にこの表2-1の結果が反映されている。中東や東南アジア以外では、会社が設営するプロジェクト現場の集団生活用の施設などが多いと思われる。

中東と東南アジア以外が同じような傾向で、東南アジアが異なる傾向を示している。

次に、現地社会でのコミュニケーションについて、マレー語やインドネシア語等の現地語の使用頻度と現地人との交流から見る。

表 2-2 日常生活での現地語の使用

	非常に頻繁に使う	頻繁に使う	時々使う	ごく稀に使う	使わない	無回答
中東	5.2%	6.7%	16.0%	26.9%	38.3%	6.9%
東南アジア	20.0%	12.0%	16.0%	32.0%	16.0%	4.0%
東南アジア以外	15.8%	10.5%	18.4%	23.7%	21.1%	10.5%

明らかに東南アジアが、日常生活での現地語の使用頻度が高い。中東では使わない人が38.3%であるが、東南アジアでは16.0%、東南アジア以外では21.1%に過ぎない。使用頻度が高いということは現地社会に溶け込んで生活しているといえる。国別に見てみると、インドネシアでは50%が非常に頻繁に使う、また頻繁に使う人が30%で合計80%に達している。これに対しマレーシア・パキスタン・ナイジェリアは現地語を使う人は少なく、主に英語を使う人が90%を越えている。東南アジアと東南アジア以外が同じような傾向で、中東が異なる傾向を示している。

また、現地の人との付き合いについてみる。

2-3 日本人以外の現地の人々との近所付き合い

	非常に頻繁にある	頻繁にある	時々ある	全然ない
中東	5.9%	11.4%	41.5%	41.2%
東南アジア	6.0%	6.0%	50.0%	36.0%
東南アジア以外	13.2%	15.8%	34.2%	36.8%

第二部の ABIC と同じように現在の日本人会の比較でも、東南アジア以外のほうが現地の人々との交流が少し多い。中東と東南アジアが同じような傾向で、東南アジア以外が異なる傾向を示している。

(3) 職務環境

職場での現地語(インドネシア語やマレー語など)の使用状況は、上記日常生活での現地語の使用で見たのと同じ傾向で、明らかに東南アジアの方が使用頻度が高い。

表 3-1 職場での現地語の使用

	非常に頻繁に使う	頻繁に使う	時々使う	ごく稀に使う	使わない	無回答
中東	4.4%	3.7%	13.8%	23.2%	43.9%	11.0%
東南アジア	20.0%	8.0%	14.0%	28.0%	22.0%	8.0%
東南アジア以外	8.1%	8.1%	13.5%	29.7%	29.7%	10.8%

東南アジアで現地語の使用が多い理由は、

1. インドネシア語会話は日本人にとって、比較的身につけ易いこと。
2. 中東のように欧米やアジアなどの外国人が Expatriate(出稼ぎ労働者)として組織に入り込んでいないので、英語の使用頻度が高くなく、現地語を使って仕事をする必要がある。

その結果、日常生活でも現地語の使用頻度が中東に比べ高くなっている。

次に、ビジネスがやり易くなってきたかについては、やり易くなった割合が東南アジアおよび東南アジア以外のほうが中東より高い。ただ東南アジア以外では非常にやりにくくなったが12.1%あり、国によって異なる。

表 3-2 ビジネスはやりやすくなっているか

	非常にやりやすくなった	少しやりやすくなった	変わらない	少しやりにくくなった	非常にやりにくくなった	分からない	無回答
中東	4.0%	20.6%	29.5%	8.4%	7.3%	22.2%	8.0%
東南アジア	2.2%	26.7%	42.2%	11.1%	2.2%	11.1%	4.4%
東南アジア以外	9.1%	30.3%	30.3%	9.1%	12.1%	9.1%	0.0%

国別ではカザフスタンが非常にと少しやり易くなった人を合わせると60%である。これに対しパキстанは非常にやりにくくなったが33.3%である。東南アジアと東南アジア以外が同じような傾向で、中東が異なる傾向を示している。

ビジネスがやりやすくなっている理由には、以下の点が上げられている。

1. 汚職撲滅が進んできている。高等教育が定着してきた
2. 投資環境の改善に向けて、現地政府が一生懸命努力している結果

3. 規制緩和がそれなりに進んだこと、および法律の整備が進んだことなど
4. 日本との友好関係継続、経済状況の好転
5. 日本側の意識が変わった。ODA 援助国としてみてきたが、資源大国として見る目が変わってきた

これに対し、ビジネスがやりにくくなってきている理由は、次のとおりである

1. 行政当局の方針変更などに影響される構図は特に従来と変わらない
2. 国の成長に伴い、現地企業が実力をつけ、競争が激化している
3. 日本のコンプライアンスの概念を現地でも展開せよとの親会社からの指示
4. 駐在国の国際的地位が相対的(BRICS や中東に比べ)に低下している
5. 政治、経済が安定しない。治安が悪い。マナーが悪い
6. 詐欺事件の相変わらずの多さ、書類手続きに関し時間がかかること、税法制度面の分かりにくさ、インフラの悪化などの問題が絶えない

(4) 現地生活の中の意識

ここでは現地社会への適応と、現地生活の満足度を見ていきたい。

表4-1 現地での生活は、全体として楽しいものですか？

	非常にそう思う	そう思う	あまり思わない	全然思わない	どちらともいえない
中東	7.9%	40.7%	31.9%	8.1%	9.1%
東南アジア	14.0%	74.0%	4.0%	0.0%	6.0%
東南アジア以外	10.5%	31.6%	23.7%	34.2%	0.0%

現地での生活は、東南アジアでは合わせて 88%の人が楽しかったと答えているが、中東では 48.6%であり、東南アジア以外では 42.1%である。東南アジア以外では、あまり思わないと全然思わないを合わせて 57.9%になる。国別ではインドネシアやマレーシアでは約 90%の人が楽しいと回答している。これに対し ナイジェリアやパキスタンでは約 80%の人があまり思わないと答えている。東南アジア以外では、治安の悪化や物価が高いこと、停電が多いなど生活面のハードシップが高く、このために生活が楽しく感じられない状況がある。

中東と東南アジア以外が同じような傾向で、東南アジアが異なる傾向を示している。但し東南アジア以外が、中東と少し異なる傾向を示している。

次に、現地生活への適応が難しかった点を複数回答で聞いている。適応が困難な点を挙げた回答者の割合を比較すると、以下の通りである。中東は習慣の違い・気候・娯楽生活のリズムを、東南アジア以外は言語・居住環境・食生活・対人関係を上げた人が多かった。

表 4-2 現地生活の中で適応が難しかった点（複数回答）

適応が困難な要因	中東	東南アジア	東南アジア以外
言語	27.7%	30.0%	47.4%
居住環境(生活インフラ)	31.6%	18.0%	36.8%
食生活	28.6%	0.0%	36.8%
交通手段	28.4%	32.0%	31.6%
習慣の違い	36.5%	30.0%	34.2%
気候	35.6%	18.0%	31.6%
対人関係	16.3%	8.0%	39.5%
情報・娯楽(新聞・テレビ)	25.4%	8.0%	15.8%
生活リズム	25.7%	22.0%	13.2%
その他	4.9%	4.0%	5.3%

(5) 現地で仕事をしている中での意識

ここでは現地での職務への適応と仕事のやりがいについてみていく。

職務への適応については、日本人会のデータでは中東以外のほうが適応に難しかった点を上げている人の割合が大きい。適応が難しかった点で多くあげられているのは、中東以外では知識・技術の格差で 40.9%の人が上げているのが目立つ。中東のほうが豊富な資金力に物を言わせ、海外の最先端の技術とそれを使いこなす外国人労働者を入れているため、知識・技術の格差を感じないと思われる。

次に仕事のやりがいについて聞いている。

表 5-1 担当国でのビジネスのやりがいを感じましたか

	大いに感じる	少し感じる	あまり感じない	全く感じない	わからない	無回答
中東	39.2%	28.2%	9.9%	2.3%	11.7%	8.6%
東南アジア	59.1%	36.4%	0.0%	0.0%	2.3%	2.3%
東南アジア以外	48.5%	24.2%	21.2%	3.0%	3.0%	0.0%

第二部の ABIC と同じように特に東南アジアが大いに感じるという人が 59.1%と多く、少し感じるを合わせると 95.5%になる。東南アジア以外は、あまり感じない人が 21.2%いる。中東と東南アジア以外が同じような傾向で、東南アジアが異なる傾向を示している。但し東南アジア以外は、中東と少し異なり、やりがいを感じない人の割合が高い。

ビジネスのやりがい、大いにおよび少し感じたという人の主な理由は次の通りである。

1. 成長性があり、大きな可能性を秘めている
2. 日本よりはるかに競争相手の少なく仕事が受注でき、やりがいがある
3. 現地政府の高官や企業の役員との交流が多く、上流階級の文化風習を体験理解する機会に恵まれている
4. 日本に比べて比較的新規商売の開発は、やり易いと考える。マーケットは比較的オープン、価格と品質で決定される要素が高い
5. コストダウン、内部牽制システム構築等、日本に比べるとまだ遅れている部分に貢献できると感じるから
6. 資源ブームの中で現地への理解・関心が高まり、案件も増えている
7. 日本のエネルギー確保に貢献するとともに、現地において雇用促進等国家開発に寄与できるから

ビジネスのやりがいを感じないという人が挙げた理由には、次のようなものがある

1. 政治・経済が不安定で、企業努力しても計画通りの成長が見込めない
2. 外資規制が色濃く残る中での商売は難しい

(6) 現地社会への認識

現地社会の認識に関する質問では、赴任前の現地への不安とその内容を聞いた。

表 6-1 日本を離れる前に現地での日常生活に不安や心配はありましたか？

	大いにあった	あった	あまりなかった	全然なかった
中東	16.0%	32.6%	35.6%	13.6%
東南アジア	8.0%	24.0%	42.0%	24.0%
東南アジア以外	34.2%	28.9%	26.3%	10.5%

中東では合わせて 48.6%の人が不安があったと回答している。東南アジアではあった人が 32%に過ぎず、あまりなかったと全然なかったが合わせて 66%に達する。東南アジア以外では、不安があった人が 63.1%ある。中東と東南アジア以外は同じような傾向であり、東南アジアの不安がなかったという数字と大変対照的である。中東と東南アジア以外が同じような傾向で、東南アジアが異なる傾向を示している。但し東南アジア以外が、中東と少し異なる傾向を示している。

具体的に不安だった点について質問した結果、健康医療面は中東と東南アジア以外、治安と人間関係は東南アジア以外が高い比率で上げられている。

表 6-2 日本を離れる前に現地での日常生活に不安だった点（複数回答）

不安な点	中東	東南アジア	東南アジア以外
家族の異文化適応(言語等)	24.7%	48.0%	10.5%
健康医療面	55.8%	18.0%	71.1%
子供の教育	19.3%	20.0%	7.9%
治安	37.0%	44.0%	68.4%
人間関係	24.4%	8.0%	28.9%

次に、赴任前の現地社会への印象を聞いている。

表 6-3 日本を離れる前に現地に対しての印象

	大変良い	良い	悪い	大変悪い	どちらともいえない
中東	3.5%	38.8%	18.5%	3.5%	33.8%
東南アジア	14.0%	42.0%	4.0%	0.0%	38.0%
東南アジア以外	5.3%	10.5%	13.2%	34.2%	36.8%

中東は大変良いと良いを合わせて 42.3%であったが、東南アジアは 56%である。中東ではドバイなどの湾岸産油国の印象が良くなってきているので、赴任前の印象も良くなってきている。東南アジア以外では、大変悪いが 34.2%、悪いと合わせると 57.4%ある。パキスタンやナイジェリアはほぼ全員が悪い印象を持っている。中東と東南アジア以外が同じような傾向で、東南アジアが異なる傾向を示している。但し東南アジア以外が、中東と少し異なる傾向を示している。

次に、赴任後の現地に対する印象は、次のとおりである。

表 6-4 現地に来た後では現地社会に対する印象は変わりましたか？

	大変良くなった	良くなった	悪くなった	大変悪くなった	変わらない
中東	5.4%	33.8%	12.3%	4.4%	42.0%
東南アジア	10.0%	42.0%	4.0%	0.0%	42.0%
東南アジア以外	7.9%	44.7%	13.2%	2.6%	31.6%

中東は良くなった人が合わせて 39.2%、悪くなったが 16.7%であるのに対し、東南アジアは良くなった人が52.0%で悪くなった人は4%である。東南アジア以外では良くなった人が52.6%、悪くなった人が15.8%である。パキスタンやナイジェリアもそれぞれ58.4%と83.3%の人が赴任した後で印象が良くなっている。ウズベキスタンやカザフスタンでは、それぞれ26.7%と40%の人が、赴任して印象が悪くなっている。中東と東南アジア以外が同じような傾向で、東南アジアが異なる傾向を示している。

また、現地に来て印象が良くなった人の理由は、日本人に対する感情が良かったことや、日本の報道と違う点に気がついた、現地社会の理解が深まった結果、などが上がっている。

1. 親日的な国民性。日本人に対し敬意を払ってくれ、争いごとを好まない
2. 日本でこの当国の報道のされ方が非常にネガティブなため、現実とのギャップが大きい分だけ逆に良い印象を受けるのだと思う
3. 外国人の受け入れに非常に寛容な点
4. 当初の予想以上に、マレー、華人、インド人が気を使いながら共存
5. 日本で報道されるほど、身近で事件が起きていない。爆弾事件も郊外とか北の国境でのことである。人々はやさしく友好的。日本人は尊敬されている
6. 人に対する思いやりの心。敬虔な生活態度。若者がまじめで礼儀正しい
7. 家族・親族を大事にする。友人との付き合いを大事に。異性への情が深い
8. 現地に住んで、現地の人と話してみないと、本当の情報を把握できない

一方現地の印象が悪くなった理由は、次のとおりである。

1. 官僚主義が色濃く残る役人・警察官の対応
2. 政治、教育、職場など、賄賂で動く。未来を担う若者が能力だけでは夢や希望を叶えられない。現地人の誇りの高さが仕事上、マイナスになる
3. 治安が悪化していること、物価が高いこと(生活は決して楽ではない)、停電が多いこと、普通のタクシーがないこと、外国人には不便が多いこと

更に、日常生活において現地の人々が持つ宗教を、意識していたか聞いた。

表 6-5 日常生活において現地の人々と交流する際、相手の宗教を意識していたか

	いつも意識していた	たまに意識していた	ほとんど意識しなかった	全く意識しない
中東	57.8%	34.8%	4.9%	0.5%
東南アジア	68.0%	24.0%	4.0%	2.0%
東南アジア以外	50.0%	31.6%	13.2%	5.3%

中東では合わせて 92.6%が意識しており、東南アジアでは 92%の人が意識している。東南アジア以外でも 81.6%が意識している。ほとんどしないおよび全く意識しない人は、中東では 5.4%で、東南アジアは 6%、東南アジア以外は 18.5%である。カザフスタンでは 60%が、全くあるいはほとんど意識しないと答えている。中東と東南アジアが同じような傾向で、東南アジア以外が異なる傾向を示している。

次に、職場で現地の人々の持つ宗教についての意識を聞いた結果は次の通りである。

表 6-6 職場で現地の人と仕事をする際、相手の宗教を意識していたか

	いつも意識していた	たまに意識していた	ほとんど意識しなかった	全く意識しない	無回答
中東	56.7%	34.1%	5.9%	0.5%	2.9%
東南アジア	70.0%	18.0%	4.0%	2.0%	6.0%
東南アジア以外	57.9%	18.4%	18.4%	5.3%	0.0%

中東では合わせて 90.8%が意識しており、東南アジアでは 88%、東南アジア以外では 76.3%が意識していた。ほとんど意識しない及び全く意識しないは、中東では 6.4%であり、東南アジアでは 6.4%、東南アジア以外では、23.7%である。

カザフスタンではほとんど意識されていない。中東と東南アジアが同じような傾向で、東南アジア以外が異なる傾向を示している。

また、現地の人々の宗教の宗派の違いについては、中東では合わせて 27.2%が意識しており、東南アジアでは 4%、東南アジア以外では 15.8%である。中東および東南アジア以外のほうが宗派の違いを意識する人が多い。中東と東南アジア以外が同じような傾向で、東南アジアが異なる傾向を示している。

表 6-7 駐在国のイスラム教徒と接する際、宗派の違いを意識したか

	いつも意識していた	たまに意識していた	ほとんど意識しなかった	全く意識しなかった	分からない
中東	7.4%	19.8%	33.8%	30.1%	6.7%
東南アジア	0.0%	4.0%	32.0%	52.0%	8.0%
東南アジア以外	7.9%	7.9%	28.9%	50.0%	5.3%

次に赴任前のイスラムに対する印象を聞いている。

表 6-8 現地に行く前にイスラムに対してどのような印象を持っていたか

	大変良い	良い	悪い	大変悪い	どちらともいえない
中東	1.5%	13.3%	23.2%	4.4%	55.3%
東南アジア	2.0%	6.0%	24.0%	6.0%	60.0%
東南アジア以外		13.2%	15.8%	7.9%	63.2%

赴任前には中東では合わせて 14.8%が良い印象を持っており、東南アジアは 8%、東南アジア以外は 13.2%である。また悪い印象を持っていたのは中東では 27.6%であり、東南アジアが 30%、東南アジア以外が 23.7%であった。中東と東南アジア以外のほうが、イスラムに好意的な印象を持っている。中東と東南アジア以外が同じような傾向で、東南アジアが異なる傾向を示している。

更に、赴任してから後のイスラムに対する印象の変化は、次の通りである。

表 6-9 現地に来た後ではイスラムに対する印象は変わったか

	大変良くなった	良くなった	悪くなった	大変悪くなった	変わらない
中東	3.7%	20.7%	5.2%	2.0%	66.2%
東南アジア	4.0%	36.0%	4.0%	0.0%	54.0%
東南アジア以外	0.0%	18.4%	2.6%	0.0%	76.3%

中東では合わせて 24.4%が良くなったと答えている。東南アジアでは 40%が良くなっている。東南アジア以外では 18.4%である。一方悪くなったのは中東が 7.2%で、東南アジアが 4%、東南アジア以外は 2.6%である。国別では、インドネシアで 35%、マレーシアで 43.3%、パキスタンで 41.7%の人が良くなったと回答している。中東と東南アジア以外が同じような傾向で、東南アジアが異なる傾向を示している。

印象がよくなった人はその理由として、日本の報道がネガティブで先入観を持っていた、イスラムの理解が進んだなどを上げている。

1. 日本でのイスラム社会の報じ方がネガティブなため(イスラム＝テロリスト、貧困者、資本主義国への敵対者)、現実とのギャップから印象が大きく変わる
2. 宗教を信じる心の清さ、美しさを知った。インドネシアには「バンチャシラ」²という国是があり、この点感激した
3. 穏便派の国に来たからだと思う。ただ、刑罰などが例えばむち打ちなどあり、文明的でないような印象も否めない
4. 印象は変わらないが、ムスリム諸国でも人々の生活態度が違うことを実感し、「ムスリム」を十羽一絡げにすることが危険であると強く考えるようになった
5. 祈りがどの宗教よりも真剣。宗教とはそこにすむ民族の共通意識が作り上げた概念で、イスラムを信じる人たちはイスラムの教えでしか真理に到達できないことがわかった。

印象が悪くなった人は、その理由として次の点を上げている

1. 真剣な人もいるが、そうでない人も多くいることがわかったから、例えば、自分に都合よく宗教を使ったり、(お祈りに行くといって仕事をさぼる等)都合よく解釈(例: 富める者が貧しいものに施しを与えるべきという教えを、金持ちから物を奪ってもよいというように誤解する等)しようとする面が見えたため
2. 不勉強な信者が多く、ご都合主義にイスラムを解釈するものの多さに閉口する事例が多くあった

² インドネシアの建国五原則。最高神への信仰が含まれている。1945年制定。

まとめ

中東と東南アジアが異なる点は、① 調査対象者の年齢構成 ② 住居の形態 ③ 赴任後の現地の印象 ④ 赴任前のイスラムの印象 ⑤ 赴任後のイスラムの印象 がある。なお、これらの点は中東と東南アジア以外は同じ傾向である。位置関係からいっても、中東を取り巻くように存在するウズベキスタン・カザフスタン・パキスタン・ナイジェリアが、(東南アジア)マレーシアやインドネシアより中東と強い共通性を持つことは、容易に理解できる。

上記の違いに加えて、中東が異なる点を示すのは、ビジネスで外国人を多数雇用している、ビジネスの環境の改善が緩やか、などの理由が上げられている。具体的には、① 日常生活での現地語使用 ② 職場での現地語の使用 ③ ビジネスがやり易くなってきたか などである。これらの点は東南アジアと東南アジア以外も同じ傾向を示している。

中東以外のイスラム国在住あるいは以前駐在の日本人の意識を調査してきたが、やはり東南アジアと、それ以外の国の対照が非常に際立って浮き彫りにされた。また中東と東南アジア以外のイスラム国の違いも浮き彫りに出来たと思う。同じイスラム国でも、政治や経済の安定性などの要素が、その国に駐在する日本人の意識に大きな影響を与えることも明らかに出来た。イスラム国の多様性を十分認識した上で、今後ビジネスや交流を続けることが、日本にとって非常に重要である。

第二部
日本人の中東以外のイスラム社会観
－駐在経験者－

滞在国および時代別にみる調査データの分析

本調査で対象とした中東以外のイスラム国は次のとおりである。

図 A 本調査対象者の駐在国別内訳

滞在国	実数	%
マレーシア	38	26.6%
インドネシア	78	54.5%
ブルネイ	1	0.7%
ウズベキスタン	0	0.0%
カザフスタン	1	0.7%
パキスタン	14	9.8%
ナイジェリア	8	5.6%
ガーナ	1	0.7%
無回答	2	1.4%
合計	143	100.0%

(注) 調査票発想部数(当該国駐在経験者数)は 204 名であった。

次に回答者を赴任時期別に見てみると、次のとおりである。

図 B 赴任年代別回答者数内訳 (中東以外)

初赴任年代	人数	%
70 年代末まで	60	42.0%
80 年代	38	26.6%
90 年代以降	42	29.4%
無回答	3	2.0%
合計	143	100.0%

中東の ABIC 会員調査と同じく、調査結果の分析を 1979 年のイラン革命までの時期(以下 70 年代末までと表記)、その後の湾岸戦争 1991 年までの時期(80 年代)、そして現在まで(90 年代以降)の 3 つに時期に区分して行った。これは中東の現代史の中で、1979 年のイラン革命と 1991 年の湾岸戦争が非常に大きなインパクトをこの地域の政治・経済に与え、中東に駐在する日本人駐在員の生活や意識にも大きな影響を与えたためである。その影響が中東以外のイスラム国でも見られるかを検証するために、この調査でも同じように赴任年代別に各質問項目をクロス集計している。

第一部では現在の“中東”と“東南アジアと東南アジア以外”の長期滞在者の比較を詳細にしたので、第二部では、“中東”と“中東以外のイスラム国”に駐在員経験をもつビジネスマンの経験を比較して、年代別の意識の変遷を明らかにしていきたい。中東の調査結果の詳細は、Research Report Series NO.2 及びこのプロジェクトのホームページを参照されたい。

(1) 個人的・家族的属性

回答者の年齢は、40代が1.4%、50代が10.5%、60才以上が87.4%であり、60才以上が多い。性別は、男性が98.6%で、女性が0.7%（1名）、また97.2%が既婚者である。配偶者の国籍は99.3%が日本国籍である。これらの属性は ABIC の会員が総合商社を中心とする退職後のOBであるからであり、中東の同会員の調査の回答者とほとんど同じである。

次に、家族の帯同状況を見る。中東のほうが家族を帯同した人の割合が多く、逆に中東以外では 単身赴任が半数以上に上る。中東は距離も遠く、また娯楽も少ないので家族を帯同したいとの傾向が強かったと思われる。時代別には、中東はイラン革命の後、湾岸戦争までの80年代は治安が不安定であったためか単身赴任が多い。90年代以降は家族の都合を理由に、子供の同伴が減って配偶者のみの同伴が増えている。

これに対し、中東以外は80年代が最も家族帯同が多い。90年代以降単身赴任が急増している。これは中東以外特に東アジア地域は日本に近く、駐在員自身及び家族が日本と駐在国を行き来するのが安価で容易なため、単身で赴任する人が多いのも理由の一つである。

表 1-1 家族の現地への帯同状況 (ABIC 中東以外)

赴任年代	単身赴任	配偶者を同伴	配偶者と子供を同伴	無回答
70年代末まで	38.3%	11.7%	45.0%	5.0%
80年代	31.6%	18.4%	47.4%	2.6%
90年代以降	81.0%	14.3%	4.8%	
合計	50.3%	14.0%	32.9%	2.8%

(2) 生活環境

ここでは、生活インフラである居住環境と現地社会でのコミュニケーションの、時代別の変遷を見ていきたい。最初に居住環境についてみる。

次頁の表2-1の通り、中東以外は全体の62.9%が一戸建てである。これに対し中東では35.7%となっている。また逆にアパート・フラットは中東以外では18.9%、中東では42.9%と多くなっている。中東以外では年代別には70年代までは83.3%が一戸建てであったが、80年代

以降減り始め、90年代以降は急激に減ってきている。一戸建てが減った分、フラット・アパートが大幅に増えまたホテル住まいも増えている。供給される住宅の形態の変化および単身赴任が増えていることが背景にある。

表 2-1 住居の形態 (ABIC 中東以外)

	一戸建て	アパート・フラット	コンパウンド	ホテル住まい	その他
70年代末まで	83.3%	10.0%	3.3%	3.3%	
80年代	71.1%	10.5%	10.5%	2.6%	5.3%
90年代以降	28.6%	40.5%	9.5%	19.0%	2.4%
合計	62.9%	18.9%	7.0%	8.4%	2.1%

次に、現地語使用頻度と現地人との交流から見る。中東以外の国では、現地語を使う頻度が非常に頻繁にと頻繁にを合わせると54.6%になる。これに対し中東では非常に頻繁にと頻繁にを合わせても約半分の25%に過ぎない。これはアラビア語・ペルシャ語に比べ、インドネシア語・マレー語の方が日本人にとって習得しやすいこと、また現地国籍の人との交流の頻度がどの年代も大きく、現地語使用の必要性が大きいことが理由である。

中東以外では現地の人々との付き合いは、12.0%が非常に頻繁にあると答えており、中東の4.8%より多い。頻繁にあるも28.9%で、中東の22.6%より多い。一方全然ないが14.1%で、中東の21.4%より少なく、中東より現地の人々との付き合いが密接なことが明らかにされた。年代別には70年代までは、中東では非常に頻繁にあった人が10%いたが、80年代以降居住環境の変化(一戸建てからアパート・フラットへ)および社会構造の変化(治安の不安定化など)の影響で現地の人々との近所付き合いは減ってきている。これに対し中東以外の地域では、80年代は付き合いが少し減っているが、どの時代も大勢として頻繁に付き合いがあった。

(3) 職務環境

職場での現地語の使用は、特に年代別の変化は見られず、第一部(5頁)を参照されたい。

担当国とのビジネスはやり易くなったかという質問に対しては、中東が90年代以降少しやりやすくなったという人が35.7%あり注目される。中東以外はどの年代もやりやすくなったという人が、32%から45%ある。安定してまた継続してやり易くなってきている。

中東以外でやり易くなった理由は、良い意味のグローバリゼーションの進展が上げられる。

1. 急激な経済発展とインフラの改善 (通信手段も格段に進歩)、
2. 1997年の民主化以降透明性が出てきた
3. EPA(経済連携協定)も発効し統制面でやりやすくなった

4. 日本、日本人への関心が高まり、時に尊敬に近いものを持ってくれた
5. 双方が国際化したなどが挙げられている。

一方やりにくくなった理由としては、優位性の変化や日本のプレゼンスの低下、および国によっては治安の悪化や政治の不安定化が影響している。

1. 相手国の経済力、技術力が上がり、日本とのビジネスが絶対でなくなった
2. 日本の生産工場を中国へシフトしている、企業への政府の規制が強い
3. 技術移転の進行に伴い、日本人の支援を必要としなくなってきた
4. FTA(自由貿易協定)＜アセアン域内＞の深耕拡大による日本の相対的後退
5. 政治的不安定、カントリーリスク拡大、経済情勢・治安の悪化

(4) 現地生活の中の意識

ここでは現地社会への適応と、現地生活の満足度を見ていきたい。

まず現地生活への適応に難しかった点を複数回答で聞いている。中東と中東以外では回答者数がそれぞれ 88 人と 143 人であり、中東以外のほうが 1.63 倍多い。これに対し回答あった数は、中東が 222 項目で中東以外は 281 項目挙げられている。合計項目数の比率は 1.27 倍で、回答者数が 1.63 倍ある中東以外の回答者が、1.27 倍しか挙げていないことは、中東以外の地域のほうが適応について困難を感じる度合いが少ないといえる。

適応が難しかった点であげられているのは、多い順に中東では①言語、②食生活、④習慣の違い、中東以外では①言語 ②居住環境(生活インフラ) ③食生活 ④習慣の違い、⑤気候である。中東以外で居住環境(生活インフラ)・気候が上げられているのが目立つ。

次に、現地の生活は、全体として楽しいものであったかという満足度について聞いている。

表 4-1 現地での生活は、全体として楽しいものですか？ (中東以外 ABIC)

	非常にそう思う	そう思う	あまり思わない	全然思わない	どちらともいえない
70年代末まで	10.2%	69.5%	11.9%	1.7%	5.1%
80年代	28.9%	57.9%	13.2%		
90年代以降	25.0%	70.0%	5.0%		
合計	19.3%	65.7%	10.7%	1.4%	2.1%

中東以外のほうがそう思うという比率が高く、中東は思わないという比率が高い。やはり中東のほうが生活のハードシップ(難易度)が高いといえる。年代別では、中東の生活も 70 年代末までは、非常に楽しかったおよび楽しかったという人が多かったが、80 年代以降治安の問題などからか思わないという人が増え、90 年代以降少し持ち直してきている。

これに対し中東以外では、80年代以降も中東の戦争や革命の影響を受けることなく、一貫して楽しかったという人が減少することなく、増加してきた。

(5) 現地で仕事をしている中での意識

ここでは現地での職務への適応と、仕事のやりがいについてみていく。

現地生活への適応に難しかった点を複数回答で聞いたのと同じように、職場での適応について聞いている。中東と中東以外では回答者数がそれぞれ88人と143人であり、中東以外のほうが1.63倍多い。これに対し回答あった数は、中東が203項目で中東以外は329項目挙げられている。合計項目数の比率は1.62倍で、ほぼ回答者数の比率に比例している。日常生活と異なり、職務上は適応に対する難易度の差はあまり感じられない。

適応が難しかった点で多くあげられているのは、中東では①土地の人のメンタリティ、②行政や官僚との交渉、③仕事の速度、④言語の順で、中東以外でも同じ傾向である。

次に仕事のやりがいについては、中東以外のほうがほぼ全員やりがいを感じると回答しているが、中東はあまり感じない(全く感じない)と無回答が21.5%ある。

仕事のやりがいを大いにおよび少し感じたという人の理由は次のとおりである。企業の駐在員の場合のビジネスのやりがいは、自分の担当地域の売上高や利益などの実績に密接に関係していることは、中東の場合と共通している。

1. 資源保有国として西アフリカ最大の市場。当時オイルブームの中、多くの業績を上げることができたから
2. マーケットが拡大する時代で新しい事業案件が多くあった
3. 多民族国家で、人種(とそれぞれの宗教)の異なるマレー人、中国人、インド人のそれぞれの特性を生かしたので、単一民族の日本よりかえって会社としての発展を期すことができた(一步間違えれば大変だが)

あまり感じなかったという人の理由として、次のものが挙げられている。

1. (当時の)ビジネス環境が未熟で悪い
2. 相手国の将来に疑問を感じた

職場での経験や日本との経済関係について中東との比較：

この調査では、中東に駐在経験を持っている人に、中東以外の国と比較して異なる点があったか、自由回答で聞いている。国によって宗教と商売やビジネスとの関連に違いがあり、また中東と中東以外の両地域の通商・交流関係について以下のコメントが出されている。

1. (中東と比較して) 商売上宗教的な関与はなかった。
2. 中東のビジネスと東南アジアのそれとは同じイスラム教を宗教としているが、実際受ける Business 感はかなり開きがある。東南アジアの場合は同じ枠、共通する部分があるという印象であるが、中東の場合は違った枠組みでお互い戦う必要があるといった傾向が強い。
3. マレーシアでは、今後、オイルマネーを背景として、中東の産油国からイスラム金融の形で資本が流れ込む可能性強い。旅行観光目的でマレーシアを訪れるアラブ人が急増している。イスラム国向け、食料輸出で求められるハラール証明³を、いち早く、マレーシアが標準化しようとしている。

(6) 現地社会への認識

現地社会への認識に関する質問では、赴任前の現地への不安とその内容を聞いた。また現地社会にどのような印象を持っていたか、赴任後それがどう変わったか、そして帰国後は更にどう変わったかを聞いている。イスラムへの印象も同じように、認識の変化を聞いた。

表 6-1 日本を離れる前に現地での日常生活に不安や心配はありましたか？ (中東 ABIC)

赴任年代	大いにあった	あった	あまりなかった	全然なかった
70年代末まで	10.00%	27.50%	45.00%	17.50%
80年代	21.40%	42.90%	32.10%	3.60%
90年代以降		57.10%	35.70%	7.10%
合計	11.90%	38.10%	39.30%	10.70%

まず、中東の上記データを見てみる。中東では、合わせて 50%の人が現地に赴任する前に不安があったと回答している。中東以外ではあった人が 39.3%で、中東に赴任した人の方が不安を多く抱えて赴任した。年代別では、中東に赴任した人はイラン革命以後の 80 年代には不安を感じた人が増えており、現地の治安や情勢の変化が駐在員の意識にも影響していることは明らかである。

これに対し、中東以外に赴任した人は、80 年代末までほとんど変化なく、90 年代以降は不安を感じつつ赴任した人が大幅に減っている。

表 6-2 日本を離れる前に現地での日常生活に不安や心配はありましたか(中東以外 ABIC)

	大いにあった	あった	あまりなかった	全然なかった
70年代末まで	15.0%	33.3%	40.0%	11.7%
80年代	10.5%	36.8%	44.7%	7.9%
90年代以降	2.4%	16.7%	61.9%	16.7%
合計	9.8%	29.4%	48.3%	11.9%

³ イスラム法に則って処理され、イスラム教徒が食べることのできる食品であることの証明。

更に具体的に不安だった点について、複数回答で質問した結果は、次のとおりである。

表 6-3 日本を離れる前に現地での日常生活に不安だった点

不安な点	中東	中東以外
治安	40.5%	53.2%
家族の異文化対応(言語等)	26.2%	18.0%
子どもの教育	26.2%	18.7%
健康医療面	56.0%	72.7%
人間関係	6.0%	4.3%
その他	14.3%	5.0%

挙げられた不安だった点の実数では、家族の異文化適応と子供の教育および人間関係が、中東のほうが回答者数に対して中東以外より約2倍比率が多かった。(パーセンテージは不安な点としてあげた人の割合を示している)

次に、現地社会への印象を赴任前、赴任後そして帰国後に分けて詳しく聞いている。

表 6-4 日本を離れる前に現地に対してどのような印象をおもちでしたか (中東 ABIC)

	大変良い	良い	悪い	大変悪い	どちらともいえない
70年代末まで	7.5%	47.5%	10.0%		35.0%
80年代	3.6%	28.6%	32.1%	3.6%	32.1%
90年代以降		28.6%	7.1%	14.3%	50.0%
合計	4.8%	36.9%	16.7%	3.6%	38.1%

中東のデータでは、大変良いとよいを合わせて 41.7%であったが中東以外は 49.7%である。中東以外のほうが現地に対しては、赴任前に良い印象を持っていた人が多い。中東の場合、イラン革命の後の 80 年代以降が、良い印象を持っていた人が減り、悪い印象を持って赴任した人が増えている。90 年代以降は大変悪いとどちらともいえない人が増えている。

これに対し、中東以外では、90 年代以降赴任前に良い印象を持っていた人が急増している。

表 6-5 日本を離れる前に現地に対してどのような印象をおもちでしたか(中東以外 ABIC)

	大変良い	良い	悪い	大変悪い	どちらともいえない
70年代末まで	1.7%	41.7%	18.3%	5.0%	33.3%
80年代		36.8%	15.8%	5.3%	42.1%
90年代以降	4.8%	66.7%	14.3%		14.3%
合計	2.1%	47.6%	16.1%	4.2%	30.1%

(赴任後) 次に、赴任後の現地に対する印象は、中東が良くなった人が 51.2%、中東以外が 52.5%である。悪くなった人が中東では 14.3%、中東以外では 10.5%である。やはり日本を出るまでに現地の正確な情報が入手するのが難しく、行ってみて初めて判り、印象が変わったという点は中東と共通している。80年代以降は良くなった人も、悪くなった人も同時に増えている。悪くなった人は現地の治安情勢が影響していると思われる。中東以外では、どの時代も良くなった人が 45-50%常にいて、悪くなった人が大幅に増加した時期は無い。

(帰国後) 最後に、帰国してからの現地に対する印象は、中東では良くなった人が 21.4%、中東以外では 19.7%であった。悪くなった人は中東では 9.6%、中東以外では 4.2%である。中東の場合悪くなった理由として、帰国後現地でのテロの発生や内乱などのニュースに日本で接したことを上げる人が多い。中東以外では、帰国してからの現地社会の印象は、どの時代もほとんど変わりなく良くなっている。

良くなった理由としては、現地の人々の生活の規律正しさなどを認識し、それを日本とまたはほかの国との比較(相対化)をして現地社会の印象が良くなったというコメントが目立つ。

1. 初めての海外駐在(東南アジア)を離れ、イラン、ロシア、中国、米国を経て、各国の異文化、人種を経験し、比較、(東南アジア)への印象が良くなった
2. 最大の問題点は役人、政治家の汚職であるが、役所の給料だけでは生活できないという必要悪の面もある。しかし、日本の役人の場合は、役所全体の確信犯的汚職、サボタージュであり、より悪質である。
3. イスラムの人々の生活、規律正しさ、礼儀、良い家族関係など、当たり前のことを強く感じ、比較すると、日本人社会の墮落、情けなさ(特に若者たち)、道徳の不備など、腹がたつ
4. 素朴な国民性(独自の信条を持った生活スタイル)特に、農村部のマレー人に親しみを感じた

悪くなった理由には、次のようなものがある。

1. 汚職が多すぎた。人間性に対する不信
2. 交通渋滞が激しくなっていること

次に、宗教についての認識を、詳しく聞いた結果をまとめてみる。

① 日常生活において現地の人々が持つ宗教について、意識していたか聞いているが、中東では 91.7%の人が意識しており、中東以外では 86.7%の人が意識していた。

② 職場での現地の人々の持つ宗教への意識は、中東では 86.9%が意識しており、中東以外では 86.7%が意識していた。

③ 現地の人々の宗教の宗派の違いについては、中東では 30.9%が意識しており、中東以外では 13.3%であり、中東の場合は宗派の違いを意識する人が多いことが明らかになった。

次に、イスラムに対する印象を赴任前、赴任後そして帰国後に分けて詳しく聞いている。
(赴任前) 始めに中東のデータから見てみる。

表 6-6 現地に行く前にイスラムに対してどのような印象を持っていたか (中東 ABIC)

	良い	悪い	大変悪い	どちらともいえない	無効回答
70年代末まで	27.5%	2.5%		70.0%	
80年代	7.1%	17.9%	3.6%	71.4%	
90年代以降		14.3%		78.6%	7.1%
合計	15.5%	9.5%	1.2%	72.6%	1.2%

赴任前には中東では 15.5%が良い意識を持っており、中東以外では 13.3%である。また悪い印象を持っていたのは中東では 10.7%であり中東以外では 16.8%である。中東に赴任した人のほうがイスラムに対する印象は少し好意的であったといえる。年代別では、中東に赴任した人は70年代末までは27.5%がまた80年代は7.1%が良い印象を赴任前に持っていたが、90年代以降良い印象を持っていた人がなく印象は悪くなってきていた。

これに対し、中東以外に赴任した人で良い印象を持っていた人は、70年代末までは16.7%、80年代は2.6%、90年代は持ち直し合わせて19.1%である。一方悪い印象を持っていた人は70年代末までは11.7%、80年代は13.1%、90年代は26.2%と急増している。

表 6-7 現地に行く前にイスラムに対してどのような印象をおもちでしたか (中東以外 ABIC)

	大変良い	良い	悪い	大変悪い	どちらともいえない
70年代末まで		16.7%	10.0%	1.7%	70.0%
80年代		2.6%	10.5%	2.6%	84.2%
90年代以降	4.8%	14.3%	23.8%	2.4%	54.8%
合計	1.4%	11.9%	14.0%	2.8%	69.2%

(赴任してから)のイスラムに対する印象の変化を聞いた。中東の場合次のとおりである。

表 6-8 現地に来た後ではイスラムに対する印象は変わりましたか? (中東 ABIC)

	大変良くなった	良くなった	悪くなった	大変悪くなった	変わらない
70年代末まで	2.5%	25.0%	2.5%	2.5%	65.0%
80年代	3.6%	39.3%	3.6%		53.6%
90年代以降	7.1%	42.9%			50.0%
合計	3.6%	32.1%	2.4%	1.2%	59.5%

中東では合わせて 35.7%が、また中東以外では 23.5%が良くなったと答えている。悪くなった人は中東では 3.6%、中東以外では 6.3%であり、中東赴任者の現地でのイスラムに対する印象は中東以外に比べ良くなっている。年代別には、中東に赴任した人はどの年代も良くなった人が70年代までは27.5%、80年代以降は42.9%、90年代以降は50%と上がり、

現地でイスラムに触れ理解が進むにつれてよくなったという人が増え、悪くなったという人は減っている。

これに対し中東以外に赴任した人は、良くなった人が 70 年代までは 18.3%、80 年代は 31.6%、90 年代以降は 23.8%である。悪くなった人は 70 年代までは 3.3%、80 年代は 5.3%、90 年代以降は 9.5%と増加傾向にある。

(帰国してから)のイスラムに対する印象は、中東ではよくなった人が 11.9%であり、中東以外では 10.5%である。悪くなった人は中東では 8.4%、中東以外では 12.6%と、中東以外から帰国した人の印象が悪くなっている。

まず、帰国してからのイスラムに対する印象の変化については、良くなった人の理由は現地でイスラムを知り理解を深めたことや、以前持っていた印象が正しくなかった、そして無宗教的な日本との比較で、現地社会の印象が良くなったというコメントが目立つ。

1. 一般に過激な言動という印象があったが、必ずしも当たっていない
2. テロは許されない行為ではあるが、背景にはイスラム教対キリスト教、核保有国対非保有国の対立があり、イスラム教だけが一方的に非難されるべきではない
3. 無宗教的な日本社会との比較で、イスラム教社会の印象が逆に良くなった
4. イスラムに対する理解が深まる、あるいはイスラム教関係国のニュース等に関心を持ったため

帰国してから悪くなった理由は、テロとの関連を上げる人が多い。

1. テロ活動が起こるようになった。自爆テロとの関わりが増えた
2. あまりに過激で、独善的な印象が固まった

日常生活や社会習慣等の中東との比較：18 頁で職場での経験や日本との経済関係について、中東との比較を聞いているが、ここでは日常生活や社会習慣等について異なる点を自由回答で聞いている。143 名中の 27 名(18.9%)が回答している。回答者の中で約 5 人に 1 人が中東と中東以外のイスラム国の両方の生活を経験している。その結果、日常生活の中での宗教との関わりあいの違いについて多くのコメントが出ている。

1. 中東では極めて宗教に統制がとれていた(いうならば、イスラムを 手段とした政治・国家統制)ので、たえず、政府行政の目をうかがっていたが、(東南アジア)では、やはり官僚統制と言えど、生活面での恐怖はなかった。
2. (中東のある国)は政教分離のない社会、(東南アジア)では政教分離がかなり実施されている。中東では、歴史、民族性、文化の理解のため、イスラムの勉強に力を注いだが、

(東南アジア)ではそうした必要性を感じなかった。

3. (東南アジア)では、中東と比較して、イスラム教への強制、押し付けがゆるい。イスラム以外の宗教にも懐が深い。

4. (東南アジア以外)では、多くの部族の集合体。日常生活で宗教を意識することはあまりなかった。多くの部族の原始宗教が大勢を占めていたと思う。

5. 中東は(東南アジア以外)に比べ、日本人にとってハードであった。(アジア人的なところが少ない)物質面、治安面は、中東のほうが(東南アジア以外)より優れていたが、住むという観点から見れば、(東南アジア以外)のほうが良い点もある。いずれの国も日本のマスコミは問題発生時のみ、表面的なことしか伝えていないような気がする。

6. (東南アジア)では、イスラム国といえども、イスラム色は薄く、休日も西欧に合わせている。また、民衆も一日五回の礼拝を街中で見かけることは少ない。食物に関しては、酒も解禁である。中東と比して、まったくフリーであるといってもよい。女性の服装についてもまったくフリーである。

7. (東南アジア)では、一部地域を除くと、彼らの宗教観が mild な印象を受ける。当時はイスラム教/ヒンズー教よりもっと生活の中に溶け込んでいた伝統的なアニミズムとしての考え方のほうがより濃くあった印象である。

8. (東南アジア以外)では国民性に違いあり。イスラムの教えがゆるやか(飲酒)、発展の度合いや民度の違いあり。などのコメントが挙げられている。

まとめ

中東の駐在員経験者の調査では、年代別に 3 つの時期に分けて分析した。イラン革命や湾岸戦争などが、中東の日本人駐在員に大きな影響を与えたからである。その結果次のような影響が調査結果から読み取れた。① 赴任前の不安の増大 ② 単身赴任の増加 ③ 治安の悪化で現地の人との近所づきあいの減少 ④ 赴任前の現地に対する印象の悪化 ⑤ 赴任前のイスラムに対する印象の悪化

今回中東以外の駐在員経験者の調査結果も同じように、年代別に 3 つの時期に分けて分析した。その結果、意識や社会構造の変化がうかがわれる項目は次のとおりである。

① 家族の現地への帯同状況 ② 住居の形態 ③ 赴任前の現地の日常生活に対する不安 ④ 赴任前の現地に対する印象 ⑤ 赴任前のイスラムに対する印象

以上の結果から、イラン革命や湾岸戦争の影響は、この調査事項に関しては、中東以外のイスラム国には波及していないが、中東でのテロや内戦が東南アジアや東南アジア以外のイスラム国に駐在した日本人の、イスラムに対する印象に影響を与えていると思われる。

Research Report Series

- No.1 日本人の対中東・イスラム観 —現地長期滞在者— 吉年 誠
- No.2 日本人の対中東・イスラム観 —駐在経験をもつビジネスマン— 谷川達夫
- No.3 日本人の対中東・イスラム観 —開発援助関係者— 吉年 誠
- No.4 シリア・アラブ共和国における全国世論調査(2007年) 青山弘之
高岡 豊
- No.5 「シリア・アラブ共和国における全国世論調査(2007年)」アラビア語報告書
- No.6 Statistics in the Arab Countries Administration Office (ed.)
- No.7 The Perception of Japanese Abroad Tatsuo Tanigawa
Towards the Middle East —Past and Present— Makoto Yoshitoshi
- No.8 Egypt Poll Survey in 2008 Administration Office (ed.)
- No.9 日本人の中東以外のイスラム社会観 谷川達夫
—長期滞在者ならびに駐在経験者—

本調査における質問票および調査によって得られたデータの単純集計の結果は、プロジェクトのホームページ(<http://www.econ.hit-u.ac.jp/~areastd/research.htm>)上で掲載されています。



編業・プロジェクト事務局

〒186-8601 国立市中2-1
一橋大学・東キャンパス
マーキュリータワー5階3507室

URL: <http://www.econ.hit-u.ac.jp/~areastd/>

研究代表者：加藤 博
一橋大学大学院経済学研究科教授

印刷：ゴトー印刷
